

---

# ナト様信仰 始まるよっ

hizy-sky

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナト様信仰 始まるよっ

### 【Nコード】

N7140Z

### 【作者名】

h i z y - s k y

### 【あらすじ】

村方草太郎は高校生である。

そんな彼は突如、銀髪金目の美貌の少女に拉致され、謎の空間に監禁される。

少女は「邪神ナイアルラトテップ」を名乗り、村方を誘惑する。

前の純潔は既に喪失していたが、それを面白く思わなかった邪神は髪を触手に形作り、後ろの純潔を強引に散らせる。

ようするに「アッー！」だ。

その後、紆余曲折があり、村方は「邪神ナイアルラトテップの信奉者」としての人生を歩まざるを得なくなる。  
ガンバレ少年、神はきつとキミの味方だろう。

## おれが触手に掘られる話（前書き）

この作品には『触手要素』があります。

触手が触手に犯される、主人公が触手に掘られる、主人公が物語の中では次元違いに強い、主人公がほとんど描写無く邪神化、主人公がニヤル様信奉者、などの要素に嫌悪感を抱く方にはオススメできません。ブラウザバックを15連打してお帰りいただく事を推奨させていただきます。

触手、好きだぜ？や触手とか大好物ですw、触手に掘られるとか俺得wといった変態触手紳士の方々の中にも、さらに嫌悪感を催される方もいらっしやるかもしれせん。

が、作者は一切の責任を持たないことをご了承ください。

## おれが触手に掘られる話

ああ、聞いてくれ。

誰でも良い、聞いてくれるんだったらオッサンだろうがババアだろうが赤ん坊だろうがイヌだろうがネズミだろうが文句は言わない。そんな贅沢は言わないし、なんなら全財産の半分をくれてやっても良い。それぐらいワケがわからない状況なんだ。

携帯も繋がらないし、衣服もビリビリに破かれて用をなさない。端的に言えばいまのオレは全裸だ。

ベツトリとした白濁液を全身にヌメリつかせて森の中に放置されてたんだ。そして傍らに放り投げられたように見知らぬ携帯電話が転がり落ちていた。

オマケに尻が妙に痛い。痔になったみたい動きに支障がある。アレだ、要するに掘られた。アッー、だ。しかも相手は触手だ。最悪だ。

こうなった発端はたぶんアレだろう、心当たりがあり過ぎる。聞いてもらっても良いか？ ああいや、断ってもキミはオレにガツチリと体を掴まれている状況だから聞く以外の選択肢は無いと思ってくれ。オレに捕まったのが運のツキだ、諦めろ、オレも色々と既に諦めている。

コトの発端は高校の帰り道だ。

オレの家は高校まで、歩いて30分くらいの距離なんだ。途中に繁華街があつてな、結構賑わつてるんだよ田舎のくせに。でだ、今日はバイトも入ってないし、特に急いで帰宅するような予定も無かつたからよ、ゲーセン行つたんだ。一人で。

ああ、勘違いスンナよ？ 別にオレに友達がいなくてワケじゃないからな。

まあ、そこら辺は良いとしてだ。ゲーセンに行つても、いつもやつてるゲームの調子が悪いみたいで修理してたんだよ。そいつで今日こそはスコア更新しようと思つていたんだけどさ、なんとというかそういうことがあると萎えるじゃん、気分つていうの？ それが。

仕方ないからゲーセン出て繁華街をブラつくことにしたんだ。そして少し歩いてるとさあ、可愛いお姉さんがカラオケのチラシを配つてるわけよ。行くしかないだろ？ 行つたよ、一人で。ご希望通り。

ああ、突っ込みは無しな。面倒だから。

んでさ、ヒトカラで思う存分音痴を曝け出して店員に苦笑いされたよ。チクシヨ、テメエも歌えよ、自慢の美声とやらを聴かせるよ。そんなわけで店員にも一曲歌わせたら意外にお上手なんだよ。あのイケメン。先輩に見つかつて怒られてやがったから笑つたわ。ザマア。

ああ、そんなこんなで気分も爽快でカラオケを終えて、次は電器店で物色しようかなとウロウロしてたらさ、居たんだよ。天使が。

ああ、ここから本題に入るぞ？ 聞き逃すなよ。

なんとなく、その天使はよ、薄い銀色のサラツとした美髪を風に靡かせて噴水のベンチにチヨコンとお座りなさってたんだ。

見惚れたよ、一目惚れだ。

遠くからでもしっかりと確認できる真っ白い肌。ロングスカートから見える可愛い足。

気づいたら彼女に向かって歩み寄ってたね。ズカズカと一直線に天使へと、熱い眼差しを携えて。ガン見だ、舐め回すように全身を厭らしい視線で視姦してたよ。近づいてみたらさ、瞬きしてるのがハッキリと見えるんだ。そしてその双眸から覗く金色の瞳にときめいたね。

気づいたら声をかけていた。ナンパなんて初体験だからさ、どう声をかけていいのかわからないけど、それでも声をかけたのさ。

「あの、」

そんな感じでね。

「見えるの？」

何故か驚いた声色で彼女は返してきたんだ。

驚愕の表情。なんというか、声をかけられるなんて思いもしなかった、そんな感じの表情だった。そんな電波な彼女の言葉にもオレは気にも留めなかった。鈴を転がしたような、消え入りそうな、そんな綺麗な声音。

「見えるよ、オレにはキミが見える。この世の誰よりも美しい少

女の姿が、この眼に見えてしまう」

思い出すと齒が浮くようなイタイセリフだが、それでもオレはそんなことを口走った。

もはや会話の内容よりも、この美しい声をどれだけ聴けるか、それがこの世の全ての問題だと思った。戦争？経済問題？そんなもの知らんわ！とばかりに。

そして喰われた。

彼女の口は弧を描いた月のように耳の辺りまで裂け、オレを頭から飲み込んだのだ。

そこからの記憶はアレだ。掘られた記憶だ。聞きたくないだろ？

聞きたい？まあ良いだろう。心して聞けよ、ウサギさん！

オレは喰われた、と思った。しかし、目を開けてみると変な場所に居たんだ。

丸いベッドに座らせられていたんだ。なにが起こったのかさっぱりわからなかったが、とりあえずベッドに座っていた。ラブホテルみたいな場所だな。

しかもだ、後ろを見たらバスローブ着た天使がニコニコと笑ってらっしゃる。こりゃもう、突撃しか選択肢は無いだろ？

で、ルパンダイブを決め込んだ瞬間、吹き飛ばされたわけだ、天使に掌底喰らわされてな。銀髪を靡かせて目にも留まらぬ速さで放



たれた顔面クラッシュヤーが直撃し、奇声を上げながら壁へと激突。気絶しなかったのがおかしいくらいだ。

「ねえ人間、キミ中々に良い感じの霊格を持っているじゃない。ちよーっこし改造されてみないかしら？」

楽しくてしょうがない、そんな風に愉快そうに嗤いながらオレの首を掴んで顔を近づけてきたんだ。もうあれだろ、ヤルしかないだろ？

思い切りキスしてやった。唇に。ネットリと。舌を絡ませて。淫靡に。濫りがましく。そのくせその内にしっかりと愛を込めて。渾身のディープキス。

ポカンとしている天使のプルップルな唇を、ついはむ様に優しく、時折貪るように激しく。ちゅっちゅちゅっちゅとしてやった。死んでも良い、そんな心境だった。

知らなかったのか？オレ、ディープキスにはかなり自信あるんだぜ？とばかりに調子に乗っていたら首もがれた。ブチブチブチッとイヤな音を立てて。痛いなんてモンじゃない。ウルトラスーパー激痛だ、バカヤロウ！と思いつつ、首だけになっても、それでもちゅっちゅし続けた。死ぬ気の根性イエーイ。

投げ捨てられ、蔑みの眼差しで吐き捨てられる。そして柔らかい足に踏まれて罵倒された。

「なんなの？この肉団子。莫迦なの？死ぬの？ゲテモノ風情が、邪神の口を吸うなんて。予想外にもほどがあるわ」

そんな言葉が聞こえた。ご褒美です。

まあ、常識的に考えてありえない。莫迦もなにも既にオレは首を

千切られてから10数秒は経っていたはずだ。意識を保っているなんてありえないし、ましてやこんなことを考えるのなんて常識外だ。ありえない。

だが、オレはその「ありえない」をありえることにしてしまったようだ。

バスローブに身を包んだ天使たんが後ろを向いてグチグチと文句を言っているのを横目に、まずは体を動かす。首の無い体が意識のあるオレの首へと近寄ってくる。

正直、我が身ながらデタラメな恐ろしさを感じることを禁じえなかったが、体はオレの首を鷲掴みにし、千切れた箇所を無理やり押し付ける。

グリグリと肉の飛び散る音を発しながら、切断面を抉るように押し付けると、これまた「ありえないこと」が起きる。

なんと千切れた頭が体とくっついたのだ。いつの間にもオレは人間を辞めたのだらう、そんな風に思いながら、血肉飛沫の音を聞いて振り返った彼女と目を合わせる。

そしてコミカルに笑いながら彼女に微笑みかける。

「やあ、美しいお嬢さん。お名前をお聞きしてもヨロシイカナ？」

驚愕。そのときの彼女の顔はそれ一色で埋め尽くされていた。

ブツブツと「そんな……」だの「本当にコレ、人間？」だの「有り得ない」だの「まさか、異空間に入った瞬間に存在が昇華したとでも言うの」「だのと呟いていた。

息を呑み、まじまじと穴が開きそうなほどガン見してくる彼女はとても美しく、思わず食べてしまいたいほど可愛らしかった。が、そこは思い留まる。ほら、オレ紳士だから。

やがて自分の中の意見が纏まったのか、コチヲを真剣な目で見つめてくる。凄く可愛い。でも自制する。だってホラ、オレ紳士だし。

「申し遅れたわね。ワタシはナイアルラトテップ。邪神ナイアルラトホテプ、ニヤルラトホテプとか呼ばれているわ」

「ああ、申し訳ありません。マドモアゼル。小生の名は村方、村方草太郎と申します。以後、お見知りおきを」

彼女の鈴の音を転がしたような、ふつくすい声音を脳内に録音しながら、紳士的な感じに挨拶をする。紳士的なオレかこええー。にしてもナイアルラトテップか。たしかクトウルフ神話に出てくる最強クラスの邪神だっけ？クトウルー初心者のおレはあまり詳しくないが。

「……まあいいわ。結論から言うと、アナタ、もう人間じゃないわ。既に理解できているでしょうけど。あからさまに人間じゃない。人間な筈が無い」

そいつはわかる。が、そこまで嫌そうに繰り返さなくてもイイじゃないですか。結構傷つきますよ、その扱い。

まあ、それはともかく、この子、可愛いなあ。まじで邪神なの？人じゃないの？たべちゃってイイの？ヤツちやうよ、イイの？

そんな感じで二度目のルパンダイブをかますも、膝蹴りで撃沈される。でもチラツと割れ目が見えたからイイヤ。バスローブで膝蹴りはしちやダメだぞっ

軽蔑の視線を向けながらも、どこか得体の知れないモノに対する気味の悪いモノをみるようなビクビクとした眼差しにビクンビクンとなりながらも立ち上がる。

「ふむ。ヒトではない。そう言われると素直に納得できる、というわけではないが、聞きたい。私はいったいどのようなモノになってしまったのか、教えてもらえるかな？マドモアゼル」

いきなり言葉の最後にキリツ！という効果音が付きそうなくらい真面目な顔で話し始めたオレを見て頭痛が起きたのか、眉間の辺りを揉むナイアルラトホテプ。

しばらくすると、オレのギャップに耐性がついたのか、はたまた気にしないことにしたのか、若干嫌そうな表情で言葉を紡いでくれた。

「とりあえず、素の話し方で話してちょうだい。頭が痛くなってくるわ。」

それはどうでもいいとして、詳しく調べてみなければわからないのだけれど、恐らくアナタはワタシが作り出したこの空間に飲み込まれた際に、霊格が変質したんでしょう。

とりあえずわかつている能力は、首をもがれたくらいじゃ死なない不死性。それとなんとなくだけど眼に強い違和感を感じるから、たぶん邪眼の類。

今のところわかるのはその程度ね。本当に意味がわからないわ」

邪眼、邪眼と仰られたか、今！テンション上がってきた。とりあえず眼に神経を集中してみる。

すると見える見える。この世の桃源郷が。まず手始めに、彼女の美しい柔肌が見える。そして桜色のポッチが自己主張しているのも、童顔のくせに中々に豊満なパイオツをお持ちじゃありませんか。あれですか、ロリ巨乳とやらですか。はっ、まさか狙ってやっているのか！くそう、かわええのう、かわええのう。

気味悪いものでも見るようにしていた天使、もとい邪神サマが怪訝そうな表情でオレを見てくる。

「まあ、どうでも良いわ。改造するつもりだったけど、今さら無理やりなコトするとおかしくなりそうだし。どうしようかしら、簡単な方向性を与えて強化していくか、それとも今あるモノを最大限伸ばすようにして基礎的なモノはそこそこ上げる程度にしようかしら。」

……そうね、後者にしましょう。これ以上無理に変調させてキモいモノが出来たら勘弁だし、今あるモノをメインにバランス良く上げていきましょう」

視線を下に向け、顎に人差し指あてて可愛らしくフンフンと悩んでいる姿にときめきながらも、丹念に体中を邪眼とやらの透視能力で視姦する。毛が生えていないことに気づき、フオオオオツツとなるのを禁じえない。

どこまでオレのツボを連打してくるのだ、この邪神ちゃんは……と戦慄していると、彼女はいきなりその銀の美髪を伸ばしてオレの体を捕らえた。

「ねえ、アナタ。ワタシとイイコト……しましょ？」

言葉尻にハートマークが付きそうなくらいに甘ったるい声で誘ってくるものだから、つい三度目のルパンダイブをかましちまった。言葉尻ってなんかエロい感じがしない？

髪の手束を一瞬で無効化し、ナイアルラトホテップのバスローブを剥く。そしてその巨乳を揉みしだく。優しく優しく、丹念に、味わうように、しっかりと。

ニアルラトホテップー好きだー！結婚してくれー！

そんな風に叫びながらの15回戦。普通なら腰もダルくなって死にそうになるだろうが、そこはホラ、オレ不死身だし？

そんなノリで解決し、ネットリと長く時間をかけた15回戦目を終え、一息つくと、背筋に緊張が走った。一瞬のうちに四肢を拘束され、空中に吊るし上げられていたのだ。

「ふう……アナタ、初めてじゃあないみたいだし？ワタシの体を好き勝手にしてくれちゃってまあ、オシオキの時間よ、ボウヤ？」

グツタリ状態から復帰した彼女はそう良い、淫靡に嗤う。こうして捕食者と被捕食者が入れ替わったのである。オレにとって最悪の形で。

凶悪な形のグロチ コもどきがドリルのように超高速回転しながら、オレの菊門へと近づけられる。

「じよ……冗談だよな？」

現実逃避をしたくてそう口にしてみるも、ニヤルラトテップはニッコリと微笑むばかり。

その様子に顔を青くし、必死に抵抗するも、ガツチリと拘束は強固で抜け出せない。コイツ、学習しやがったなッ！と戦慄する。

ケツの穴を埋め尽くす痛みと、なにか掛け替えの無いものを失ったかのような喪失感に、意識を持っていかれそうになりながら最後に聞いたのは

「ナト様とお呼びッ！」やら「ケツ コは気持ち良いかい？この肉袋ッ！」といった、ハツチャけた邪神サマの高笑いだった、そういうわけだ

笑えるだろ？

おれが触手に掘られる話（後書き）

どうですか、期待はずれでしたか？

触手のなんたるかをわかっていない？触手が触手に犯されていない？男が触手姦されても興奮しない？タグ詐欺？金返せ？

それは申し訳ありません。なにしろワタクシ、触手紳士を自称して3日の若輩者。どうか皆様の良心にお見逃し頂けるよう、お願い申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7140z/>

---

ナト様信仰 始まるよっ

2011年12月24日01時49分発行